

# 富谷市市民協働セミナー

市民協働のまちづくりについて  
～協働の考え方と取り組み～

## 報告書



日 時 平成31年1月13日（日）

午前9時30分～正午

場 所 富谷市役所1階市民交流ホール

富谷市総務部市民協働課

**【目的】**

本市総合計画に掲げる「市民の思いを協働でつくるまち」を一層推進するため、市民が協働の基本的な考え方について理解を深め、実際の活動事例等を通して、協働を学ぶとともに交流の機会とするため、市民向けに開催するもの。

**【プログラム】**

1. 開 会（9：30）
2. あいさつ 富谷市長 若生 裕 俊
3. 講 義  
テーマ：市民協働のまちづくりについて ～協働の考え方と取り組み～  
講 師：公立大学法人 宮城大学事業構想学群 准教授 佐々木 秀之 氏
4. 活動紹介  
パネラー 鷹乃杜町内会 会長 門 間 とも子 氏  
成田マルシェ 代表 増 田 恵美子 氏  
NPO 法人 SCR 代表 村 上 幸 枝 氏  
アトリエジーナ 代表 富 樫 花 奈 氏  
Los Encantadores F.S. 代表 山 下 咲 子 氏
5. ワークショップ
6. まとめ
7. 閉 会（12：00）

**【講師・ファシリテーター】**

公立大学法人 宮城大学事業構想学群 准教授 佐々木 秀之 氏

**【プロフィール】**

仙台市出身

東北学院大学大学院修了 博士（経済学）

2016年4月 宮城大学事業構想学部 事業計画学科（現、事業構想学群 地域創生学類）に所属。2018年4月より学類長。

**【主な経歴】**

協働まちづくり推進助成制度審査委員（仙台市）、起業創業アドバイザー、まち・ひと・しごと創造ステーション支援（利府町）、町民提案型まちづくり事業審査委員会副委員長（加美町）、とみやわくわく市民会議座長（富谷市）など。

## 【富谷市長 若生裕俊】

皆さん、おはようございます。本日は休日のお忙しいところ、このように多くの皆さんに富谷市市民協働セミナーにご参加をいただきまして、心から御礼を申し上げます。



さて、富谷市の市制施行に合わせて策定しました総合計画におきまして、4つの大きな柱のひとつに「市民の思いを協働でつくるまち」を掲げさせていただきました。

これまでの時代は、行政が全てを担うというところがありました。が、これからの新しい時代は、行政が全てを担うことには限界がある中で、いかに市民の皆さんの思いを受け止め、そして、いかに市民の皆さんと共にまちづくりを進めていくかという、市民の皆さんの協働、参画ということが大変重要であります。

このことから、新しい時代に向けての総合計画の大きな柱として「市民の思いを協働でつくるまち」を掲げさせていただいたところであり、また、本日この市民協働セミナーを開催させていただいたわけでございます。

本日は大変お忙しいところ、宮城大学の佐々木先生に講師をお務めいただくこととなり、改めて心より御礼を申し上げます。

佐々木先生は、市民活動または市民協働の実践家としても幅広く活動されてこられた方でございます。現在は、宮城大学の事業構想学群の准教授としてご活躍されておりますが、大学に籍を置きながらも、県内外で、様々な市民協働に今も大きく関わっておられます。

富谷市におきましても、本年度のわくわく市民会議の座長を務めていただくなど、大変お世話になっている先生でございます。

また、本日パネラーとしてご登場いただく5名の皆さんは、すべて女性の皆さんでございます。なおかつ、それぞれのお立場で本当に素晴らしい実践をされている皆さんでございます。

国が女性総活躍社会を掲げておりますが、本市は、既に女性が総活躍している市ということで、本当に誇りに思うところでございます。

本日は、パネラーの皆さんの実践を参考にいただきながら、これからの新しい「市民の思いを協働でつくる富谷」を目指していきたいと思っております。

私は、この市民協働の話をするときに、58年前、第35代アメリカ大統領に就任したジョン・F・ケネディの就任演説の言葉を思い出します。

当時、大統領は就任にあたりまして、「あなたが国に何をしてもらえるのか問うのではなく、あなたが国のために何ができるのかを問うてほしい」という演説を、新しい時代に向けてされたわけでございます。まさに58年経って今、我々は市民協働の中で、その言葉をしっかりと活かしていかなければならないと思うところであります。

本日は限られた時間ではございますが、意義ある、そして充実した市民協働セミナーになることを心からご期待を申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

【公立大学法人 宮城大学事業構想学群 准教授 佐々木 秀之 氏】

今日は、富谷市の市民協働セミナーということで、私からお示しておりますタイトルは、「市民協働のまちづくり ～協働の考え方と取り組み～」です。

昨年、わくわく市民会議の座長を務めさせていただき、年4回のワークショップを住民の皆様と実施させていただきました。

その中で私自身も富谷について多くを知り、皆様と色々なことを調べてきました。

今日はそのまとめということになりますが、これまで通り私が主役ではなく、パネラーの皆様が主役ということで進めていきたいと思えます。

富谷市の市民協働は、これからスタートというよりは、既に活発化していますので、セミナーでは、そのことをあらためて確認していきたいと思えます。

その上で、先ほど市長からお話がありましたように、さらに私たちに必要なことは何で、今後何をすべきなのかということ、皆様と考えていきたいと思えます。

本日のセミナーのタイトルに市民協働という表現がありますが、よりイメージしやすくするために、市民参加という言葉に置き換えて考えても良いと思えます。

協働というと難しく捉えがちな場合が多くみられます。

昨年の12月25日に、共著で「復興から学ぶ市民参加のまちづくり」という本を刊行しました。

震災復興のまちづくりの中で何が起きていたかということ振り返ると、注目すべきは地域・コミュニティ主体の復興、つまり市民参加・市民協働ということだと思えます。

私たちもしっかりと学びながら実践を重ね、地域社会に還元していきたいと思えますし、富谷市の事例もどんどん発信していく時期にきていると思えます。



### アメリカオレゴン州ポートランドの取り組みについて

この富谷も、「住みたくなるまち日本一」をスローガンに掲げていますが、住みやすいまちと検索しますと、アメリカのポートランドが出てきます。

ポートランドというところは、全米で一番住みたいまちと言われていますが、検索された書籍のタイトルを見ると、「なんの変哲もない、とりたてて魅力もない地方都市、それがポートランドだった」というものがありました。

必ずしも最初から人気のまちだったのではなく、普通の地方都市だったというわけです。それが何らかの工夫をすることによって、全米で一番住みたいまちになっていったということなのですね。

その他の本のタイトルをみても、『オレゴン州ポートランドのまちづくり、住んで・協働してわかった』などがあり、住みやすいまちということには、市民活動・市民協働が活発であることもキーワードの一つとなっていることがわかります。

ポートランドは米国の西海岸、シアトルの南に位置します。

このポートランドが住民にとって住みやすいまちといわれる要因の一つに、公園の存在があります。

まちに何が必要かと考えたときに、ポートランドでは多くの公園を造った、あらためて造るというよりも、有るものを整備したということであったと思いますが、このまちに多くある公園によって、例えばシアトルという工業都市から移住してくる人もいます。

ポートランドの公園の様子を撮影した写真をお見せします。公園では様々な市民活動が行われています。

公園で絵を描いている方に、なぜポートランドに移り住んだのかと聞いたところ、この方はシアトルでエンジニアをされているのですが、住むところを選択する際、緑の多いこのまちを選択したのだということをお話してくれました。

ポートランドの公園では、ファーマーズマーケットが数多く展開されています。農家が野菜を持ち寄って販売する、地産地消のモデルです。日本にも、互市など何百年も前から続く市場（いちば）があり、必ずしも海外を称賛するわけではありませんが、公園の活用やファーマーズマーケットとしての利用は日本でも盛んに行われるようになってきました。

有名なところでいえば、東京の青山学院大学の向かいにある国連大学広場で開催されるファーマーズマーケットはあります。そこには、東北からの出店もみられます。

ポートランドの中心部に、パイオニアスクエアという公園があります。

市中心部には高層の建物が多くある中、一つのビルの取り壊しが行われた際、跡地をどう使うかという議論のなかで、市民は広場を造るという選択をしました。

そのプロセスも非常に重要ですが、広場を造っている途中で資金が不足したところ、市民が寄附してでも造るという動きを展開したのです。

今も広場の敷地に張り詰められたレンガをみると、その一枚一枚に人名が入っているのを確認することができます。高額ではありませんが、地域の方たちが少しずつ資金を出して、愛するまちをつくりだしていったのです。



それらがなぜ住みやすさやまちづくりに繋がっているのかというと、マルシェの開催や公園・広場を造ったということだけではなく、今注目されているのは、ソーシャルキャピタル（社会関係資本）といわれる、人と人との繋がりというものが、それらの仕組みによって濃密になっているということが重要であると言われています。

さて、ここまで海外の事例を紹介させていただきましたが、実はそうハードルが高くないものであるということが分かったのではないかと思います。

そんなときに市民協働や市民参加のまちづくりというものの原点となるのは、やはり人と人との繋がりであるとか温かさとか励まし合い、そういう日本にそもそもある互助や共助などが改めて大事になってくるのだということをお話をさせていただきました。



## グループディスカッション

ここで15分程度時間をとりますので、テーブルごとにグループディスカッションの時間を設けます。

これから協働について講義を進めますが、その前に、参加者の皆様の持っている協働のイメージや概念を確認、共有しておきたいと思います。

このテーマでのディスカッションは、わくわく市民会議のほかに、昨年10月に講演しました職員研修会の場でも実施しています。

では、協働について、ポジティブな話題でも、ネガティブな話題でも、どんなことでも構いませんので、率直に意見を出し合ってください。

それでは、簡単な自己紹介をしたうえで、協働についてのディスカッションにはいります。時間の関係がありますので、一人1分以内でお願いします。

### 《各テーブルで話し合い》

そろそろディスカッションを終了にします。それぞれ意見が出し合ったあと、さらに協働に関する議論が進んでいったテーブルもありました。

少し聞いてみたいと思います。テーブル内の協働に対するイメージや意見がほぼ一致していた、というテーブルはありますか。（多くのテーブルで挙手）

次に、意見は各々でばらばら、分散していたというテーブルはありますか。（少数で挙手）

ありがとうございます。2択で何うと、ほぼ一致していたとなりましたが、テーブルを回ってディスカ

セッションの内容を聞いていた限りでは、大枠では一致しているものの、個別の事例となると、それぞれの協働に関する意見の相違が見られました。

ここからは「協働」の定義や概念についてみていきたいと思います。

## 協働の定義について ～異なる複数の主体による多様な協働～

学術的にはどう定義されているのでしょうか。

この協働という表現ですが、学生に「きょうどう」と漢字で書いてください、と投げかけてみたところ、この「協働」を用いる学生は殆どいませんでした。

「きょうどう」と言うと、まず「共同」が出てきます、共同体や共同浴場などといった形で用いられています。共同や共同体に関する研究は、これまで社会学や経済学において、非常に関心の高いテーマでした。

共同や共同体によって、いかに地域の集落が経営・維持されてきたかを明らかにするという研究です。近世以前が主な研究の年代でした。

明治に入ると、商法も定められ、今度は地域集落だけではなく、事業体、いわゆる企業や会社の存在が出てきます。

そうすると、地域集落の経営という意味を持つ「共同」に加えて、事業者間の連携による経営を意味する「協同」という表現が出てきます。

この協同が使われる例として「協同組合」があります。「共同」の「共」を協力の「協」に置き換えて、この表現が出てきたのでしょうか。これで「きょうどう」が2つになりました。

3つ目となる、今回のテーマである「協働」は、ほぼ平成に入ってから頻繁に使われだした表現と考えられます。

まず、共同というものがあり、次に協同となり、今度は、「きょうどう」の「どう」の方の漢字を変えて、「協働」という表現が出てきたということになります。

それは集落の共同経営、事業者間の協同経営に対して、これは自治体の経営という文脈で使われていきます。

ただ、近年では、協働という表現が、マーケティングの分野でも活用されていることが確認されます。

ビジネスにおいて共感というものが重要視されてきた、協働マーケティングや共創マーケティングという表現がみられます。

学生に「きょうどう」を漢字で書いてみて、といってもなかなか出てこなかった「協働」ですが、辞書を調べてみますと、協働という言葉が既に記載されていることが確認できます。すでに一般化されている表現ということになります。

『広辞苑』の第6版では、協働について、「協力して働くこと」とシンプルに定義しています。

働くというと、実際に動くとは色々なバリエーションが出てきます。そこが面白いところでもあり、難しいところでもあるわけです。



この協働という言葉はどこから出てきたのでしょうか。

この協働という言葉は、アメリカのインディアナ大学のヴィンセント・オストロムという学者によって、1970年代に定義された概念が根底にあります。

これがどういう概念かという、一言で言えば、コ・プロダクション（Co-Production）ということです。

この「Co」というのは協力や一緒にやるという意味で、「Production」は生産ですので、共に生産するというイメージで1977年代に、コ・プロダクションという概念が提示されました。

では、これが日本に入ってくるのはいつかという、1990年代ということになります。

平成も間もなく終わってしまうわけですが、平成の一つのトピックというのが、この協働のまちづくりということなのです。

1990年代に、荒木昭次郎という学者が協働という概念を提唱しました。

そのもとになったのが、先ほどのヴィンセント・オストロムの提唱した概念です。大事なことなので読み上げてみたいと思います。

「住民と自治体職員が心を合わせ、力を合わせ、助け合って、地域住民の福祉の向上に有用であると自治体政府が住民の意思に基づいて判断した公共的性質を持つ財やサービスを生産し、供給していく活動体系」と荒木は定義しています。1990年に刊行された『参加協働—新しい住民—行政関係の創造』という本に書かれています。

冒頭で「地域住民と自治体職員」と述べており、この2つの主体に注目していることがわかります。

住民と自治体職員が一緒になってやる必要があるのだということを示していますが、逆に言えば、それまでは一緒になってやる必要がなかったのかもしれない。

それが、1990年代になると、平成不況という時期に突入します。行財政も悪化していきました。自治体経営において、住民と一緒に取り組むということが財政面からも必要、ということになってきたわけです。

実際に協働というものを進めると色々なエラーが出てきます。

このエラーが出てくるのは、悪いことではなくて、やはり何かやると、何かと問題も出てくるのは当然のことです。

特に、協働やパートナーシップと言ったときに、どうでも良いことと思われるかもしれませんが、どっちが上でどっちが下であるなど、対等関係というものの難しさに直面していった訳です。

それが実際の運用の面においても出てきましたし、研究の中でも公私の関係というものが取り上げられ、一つ間違ると支配関係になってしまうということが指摘されていました。

とはいえ、日本ではこういう議論が活発に展開され、エラーあったとはいえ、協働が、どんどん進んでいきました。

一方のアメリカでは、例えばコ・プロダクションという概念は、実態としては殆ど浸透しなかったのです。

ただし、ポートランドの例にもありましたように、市民活動や市民協働は概念を示さなくとも活発に進んでいたのは先にお話した通りです。

さて、荒木昭次郎による協働の定義も、東日本大震災を経て、再定義されています。

「異なる複数の主体が互いに共有可能な目標を設定し、その目標を達成していくために、各主体が対等



な立場にたって自主・自律的に相互交流しあい、単一主体で取り組むよりもより効率的に、そして相乗効果的に目標を達成していくことが出来る手段」と再定義されました。

2012年に刊行された『協働型自治行政の理念と実際』という本の中にこの記載があります。

当初は、地域住民と自治体職員という2つの主体であったものが、この間の協働の実践、東日本大震災を経て、「異なる複数の主体」とされました。

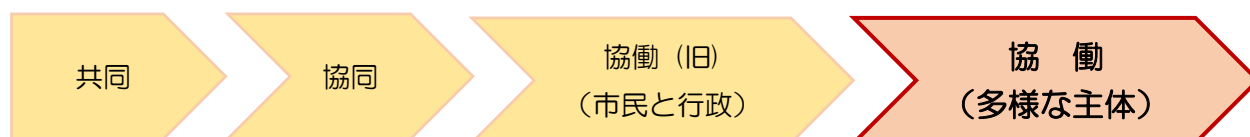
たしかに東日本大震災の現場では、地域住民と自治体職員以外にも、多くの皆様の参加があって、復興を乗り越えてきました。

協働によるまちづくりには多様なセクターの参加が不可欠だといっている訳です。

今日も学生と一緒に活動していますが、学生の意見も必要ですし、企業や事業者の皆さん、町内のあらゆる皆さんの存在が重要になります。

異なる世代、異なる複数の主体と書いてありますが、世代間の協働も重要です。

地域における高齢者の活動も欠かせないものですし、孫と一緒に活動する事例も見られてきました。異なる複数の主体が互いに共有可能な目標を設定し、その目標を達成していくために各主体が云々とありますけれども、このような形で、荒木さんが震災を経て、『協働型自治行政の理念と実際』という本の中で、協働を再定義したということ踏まえながら、これからの協働を考えていく必要があります。



### 近隣自治体の取り組み ～事例から見てくること～

実際に、全国の自治体をみても、協働の再定義が進みつつあります。本年2019年の4月で、平成が終わることになりますが、平成期の一つのトピックが、この協働のまちづくりということであったと思います。次の時代に向けて、協働はさらに進化していくでしょう。

進みつつある協働の再定義について、自治体の動きをみていきたいと思います。私が委員として関わりました、隣の仙台市の事例を紹介します。

仙台市は、市民協働を全国的にみても先駆的に取り組んできた自治体です。ただし、10年以上も経過すると施策をバージョンアップする必要性は出ていたわけで、震災の経験が引き金となって、2015年に市民協働に関する条例そのものを改定するという決断をしています。

1999年に制定した、市民公益活動の促進に関する条例を、2015年に全面的に改定し、仙台市協働によるまちづくり推進のための基本方針としたのです。

仙台市の場合、この市民協働と協働という言葉を使い分けていることが条例から見て取れます。

ちなみに、先ほど「協働」という表現は辞書に記載されていることを紹介しましたが、市民協働という表現は辞書への記載はありません。

日本全国における市民協働と協働の使い分けについては、各自治体によって当然違ってきます。

仙台市の場合まず「市民協働」については、市民協働という言葉の市の部分を仙台市の市と捉えており、民をいわゆる住民の民としていますので、荒木昭次郎による最初の定義の、地域住民と行政（自治体職員）という意味で市民協働を使っています。

新しい条例では、この条例を、協働まちづくり条例と呼称しているように、市民協働ではなく、むしろ協働という表現を多用しています。

具体的には、荒木昭次郎の再定義に沿った形で、多様な主体を意味するマルチパートナーシップを活動の主体として捉えています。

仙台市は協働のまちづくりの理解を図り、促進するために、「協働まちづくりの手引き」と「協働まちづくりの実践」という2つの冊子を作成しました。

具体的には、マニュアルとなる手引きと事例集の2冊です。

条例の全面改訂後、市民活動サポートセンターの改装とこの協働の手引きのリニューアルを行いました。



もともとはこの手引きは、行政職員を対象とするいわゆるマニュアルだったのですが、行政職員だけでなく、多様な主体に見てもらえるように、事例集を作成し、マニュアルとしての手引きと事例をリンクさせた2冊の冊子を作成したのです。

これは仙台モデルとして他の自治体にも広がりつつある取り組みになりました。

協働も再定義されていく過程において、紆余曲折がありながらも、実際に多くの実践が行われてきたわけで、むしろその実践こそが大事であると考えた訳です。事例集には、25の実践事例が掲載されています。

事例集といいましても、そんなに長々と書いてあるのではなく、一枚もののペーパーで25事例掲載しているだけです。これはどこの自治体でも即実行可能なモデルです。事例集ですので、あまり長く書くと逆に分かりにくくなり、実践につながらないということがあります。

見やすいデザイン、どんな協働の仕組みなのか、どんな人々やセクターが関わっているか、協働にはどのようなエッセンスが必要なのか、というテーマで作成した事例集です。

富谷市では、広報などで市民活動やNPO活動、企業活動の紹介が積極的に行われていますので、いずれそれらをまとめて発信することが、協働の促進につながると思います。

作業を進める過程では、市民をきちんと巻き込んで作成することがポイントです。作成の過程で、あらためて自身のまちを知るとともに、愛着が醸成されていきます。その結果、協働の効用と楽しさが伝わっていきます。

この仙台市の事例集は、インターネットでダウンロードすることができます。事例集の「はじめに」や「協働のグッドポイント」の部分は私が書いておりますので、是非読んでください。

読んでいくうちに、うちのまちにはこんな事例があるぞ、となったら是非担当課に情報提供をお願いしたいと思います。

これまで、海外の事例や隣接する仙台市の取り組みを紹介してきましたが、どの自治体も特色ある活動が既になされていると思います。

## 地域から発信 ～民間の力～

富谷市では、TOMI+（とみぷら）が開館し、更に多くの取り組みが生まれています。そこには起業・創業の動きも連動しています。

ただし、ここで留意しなければいけないのは、新たな活動も、これまでの活動が土台にあって、また地域の理解や支援があってできているということをきちんと認識しなければならないということです。

私たちが新しいまちづくりを進める中でも、これまでの経緯や歴史にきちんと敬意を払っていかなければならないということを忘れてはいけません。

仙台市の市民協働の取り組みがこれまでトップランナーであり得た理由としては、行政だけではなく、民間の加藤哲夫さんという方がリーダーシップを取って進めていたということが重要な要素でした。

富谷でもかつて加藤さんの講演があり、市民協働のアドバイスがあったと思います。

加藤さんの逝去後、縁あって、加藤さんの資料整理をする機会がありました。1, 500点の資料をデジタルアーカイブするという作業をしました。その中で、富谷に関する資料をみかけたことがあります。

加藤さんは、富谷、仙台だけでなく、全国的な協働の推進者として活動していました。海外や先進地からも情報を集めながらも、むしろ東北から発信しようとしていたのですね。

我々も、情報を受け取って活かすと同時に、積極的にオリジナリティな部分を創造し、発信していくことが求められますし、それによって、協働の範囲がひろがり、地域連携や交流が生まれることにもつながってくるのです。

これから協働ということを考えていく上では、地域住民と自治体職員の2者だけでなく、多様な主体によって協働を進めていくことが重要になってきます。

参加者や参加するセクターが増えれば、それはそれで何らかのエラーが発生するでしょう。そこで大切なことは、その多様性を彩りと捉えて、それぞれの個性を認め合い、活かしていくことです。

彩りある協働ですから、色々な議論がむしろ必要になってきます。

協働で物事を進める場合、プロジェクトが進むにつれて、徐々に、それぞれの思いや考えがずれていくことがあります。

それは当たり前前で、ですから始める前の議論や到達目標やミッションの設定、チームビルディングということが大事になってくるわけです。

今日も講演の中で、皆さんそれぞれの協働の考えを都度伺ってきましたけれども、それぞれに多様な協働の経験を有しており、各論では意見の相違がみられることも確認できました。

## まとめ ～彩りある協働～

意見の相違があるということを最初に理解してから進めると、協働というのはもっと楽しいものになるのではないかなと思っています。

実際に上手くいっているとされるまちづくりをみていると、本当に色々な方々がまちづくりに参加しています。

市民の皆様もそうですし、事業者の皆様、あるいは行政の皆様、議会の皆様、そしてまた幼稚園の児童から、小学生以上の学生、青年、中年、高齢者まで本当に多世代の方々が関わっている。

それぞれの思惑が違うということは当然のことであり、そこでは紛糾することもあるでしょう。

ただ、突き詰めていくと、一緒に汗を流していれば、実は思いは一緒だということが多くあります。

市民協働や協働まちづくりというものは、個人や一企業の利益を求めるものではなく、公益活動ということで、地域や社会の利益を求める活動ということです。

ただそれが循環して、公益活動が得てして地域の事業者の利益にも繋がってくるものでもあります。経済・環境・社会のそれぞれのサービスから得られる利益をきちんと還元していくという意識も必要になってきます。企業のCSRやCSVといわれる活動もさらに重要になってきます。

協働で進めるべき地域課題はその多くが難問です。これが正解でこれが間違いということも必ずしも決められるものではありませんし、たとえ瞬間的にうまくいなくても、中長期で見ればそれが必要だったということは多くあるわけです。

課題の捉え方も重要になってきます。課題解決型のプロジェクトにおいて、海外と日本の一番大きな違いは、課題の捉え方なのかと感じています。どうしても日本の場合、課題というと、粗探しとイイですか、ここが悪い、あれが悪いというようになってしまっているのですが、逆に海外で課題と考えるときは、課題をチャレンジと捉え、ああこの課題はこういうチャレンジがされているよねということで、日本よりポジティブに考えるというところは私たちも学ばなければならないのかなと思っています。

地域はチャンス宝库だということを念頭に、ポジティブな協働を進めていくことが肝心だと思います。多様なメンバーがそれぞれの役割を担うことで、多様な、彩のある協働が進められていくことでしょう。





#### <ファシリテーター 佐々木先生>

富谷市で活動を展開する5団体の代表の皆様に登壇いただきました。テーブルには富谷産ハチミツを使ったお茶が用意されました。富谷産のハチミツで喉を潤しながら、サロンのような雰囲気、和気あいあいとやっていきたいと思います。

それでは司会の方から、ゲストの皆さんをご紹介します。

#### 《司会よりパネラー紹介》

前半は、私の方から海外の事例も含めまして、協働の現状についてお話させていただきました。

後半は身近な富谷の活動事例の報告です。現在、様々な局面で、地域活性には女性の活躍が必要といわれています。富谷でも、女性の活躍が非常に目立ってきました。

そこで今回は、女性が中心になって活動を展開している、富谷の5団体の皆様に登壇いただき、お話いただき、パネルディスカッションを企画しました。

それでは早速ですが、プレゼンテーションに移ります。持ち時間は5分でお願いします。

最初のプレゼンターは、町内会の事例として、鷹乃杜町内会 会長 門間とも子さんです。

## 鷹乃杜町内会 会長 門間とも子 さん



よろしくお願いします。

町内会の会長をしております門間と申します。今朝も一仕事してまいりました。第2日曜日でしたので、資源回収と大掃除の日でした。

私たちだけではなくて班長さんが冬場も出ていただきます。これが町内会の活動の良いところだと思います。色々あるのですけれども、鷹乃杜は約1,000世帯が暮らしています。

その中で、年齢とすれば平均年齢が48歳という非常に若い、しかし平成30年度の後期高齢者は354人でした。この状況が、お互い助けあえることで、一つにまとまっているというところですか。非常に大きな団地ですが、住みよいまちというところですか。

皆さん終の棲家として求められてきていますので、コミュニケーションを取らなければならないということが一番です。その努力は町内会がやはりやっていかなくてはならない事です。

年間行事としては非常に多くあります。大掃除は毎月皆さんと顔を合わせる楽しみですし、資源回収は、捨てればゴミですよ、やっぱり資源を大切にしましょうということで、これも月1回やっております。この収益が結構あるということも、他の町内会もご存知だとは思いますが、収益金は会員の皆様の資金になります。

行事とすれば季節ごとに、今月は新春囲碁将棋麻雀大会というのがあります。

それから2月の始めにはお餅つき大会、子どもの参加が楽しみです。年間通して多くの行事をやりながら、その人たちに合う部分を吸収していきたいと思います。

## あいさつのまち鷹乃杜

今日、佐々木先生のお話の中で、協働という話が出ましたが、私たちも協働というものを非常に大切にしております。住んで良かったなという富谷市町内会に来て良かったな、という部分が非常に大切な結束だと思います。

助け合うことで、20年前からは、会ったらご挨拶ができる町内にしようということで、「あいさつのまち鷹乃杜」という看板を1,000枚作りました。各お家に架けさせていただいております。誰と会っても挨拶できるようにしようということですね。

この間、2年前に作ったものは、震災があって以降、非常に考えさせていただきまして、「あいさつのまち鷹乃杜」の裏に、「無事です」と入れました。これも1,000枚作って皆さんのお家に架けております。町内会のもっとも大切な活動です。

## ボランティアの協力

ただ、やはり「元気なまち鷹乃杜」ということと言えば、伝承文化も大切、それから日々起きてくる社会の目まぐるしい中で、それにも合ったような活動をしなくてはならないということで、非常に町内会の役員は大変だと思いますが、先ほど出ていた協働の力というのがあって、ボランティアというのも今は活

用させていただいております。

役員を辞めた方にボランティアで参加をお願いし、役職はつかなくてもやっていただけるという制度と言いますか、そんな部分を多く使っております。

### 街かどカフェの実施

富谷市になりまして、2年になります。同時に「街かどカフェ」を作らせていただきました。

これは富谷市の長寿福祉課と社会福祉協議会、町内会が一緒になってやるという事業ですが、毎週火曜日、鷹乃杜だけではなくて、富ヶ丘南部・北部という地区もやっておりますが、一週間のうち、どこでも行っても良いということで、コーヒーを飲みに行ってお話をしましょう、それから歩ける距離がちょうど1km圏内どこに行っても歩けますよというところで、設定させていただきました。

その中で今現在は、平均、火曜日25名くらい、10時オープンです。皆さんも是非一度、火曜日に鷹乃杜カフェにいらしていただければ幸いです。

カフェにつきましては、高齢者だけではなくて団塊の世代がちょうど差し掛かってきております。

この人たちが2025年を迎えるにあたって、やはり色々な方とのお付き合いが必要ですし、楽しく暮らせる町内会にしたいと思っております。よろしく願いいたします。

#### <佐々木先生>

ありがとうございました。現在、各地の町内会活動が多く課題を抱えている中、積極的に住民の参加を、多様な取り組みを通して促し、町内会活動を展開しているということでした。

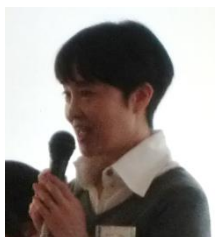
冒頭で海外の事例を紹介いたしましたが、日本にも学ぶべき取り組みは多くあり、町内会活動はその最たるものなのかと思っております。震災時も、こうした地域コミュニティの重要性は再認識されています。

話の中にありました、ボランティア制度の導入や、「あいさつのまち鷹乃杜」というキャッチフレーズの作成、街かどカフェの実施といった取り組みを、協働で展開しているのは、素晴らしいモデルだと思います。

ちなみに、先ほど紹介したポートランドでも、ネイバーフッド・アソシエーションという地域コミュニティがあります。ぜひ調べてみてください。

次は、成田マルシェ 代表の増田恵美子さんです。

## 成田マルシェ 代表 増田 恵美子 さん



皆さんこんにちは、成田マルシェ代表の増田です。私たちは震災の翌年に活動を始めました。

あの震災の後の日々というのは、これからどうなっていくのだろうという、味わったことのない不安もありましたけれども、同時にお互いに励ましあって助け合って、ああ、こんなにも地域って力があるのだ、心強いものなのだということを感じた時間

でもありました。

それをきっかけに、普段からこのような温かい繋がりがあ地域にしたいなと思ったのがきっかけです。

### 地域のだれもが参加できるイベント ～震災を経験して～

私たちは成田に住む全ての人たちを対象としておりますので、赤ちゃんのためのベビーマッサージもすれば、高齢者の方が居る福祉施設に行き、一緒に芋煮会をすることもあります。

大変好評なのは制服や体操着のおさがりをお渡しする「おさがりの会」、それから子どもたちの居場所を提供する「まかない付き寺子屋」、あと是非男性にも参加していただきたいと成田にあるカフェのマスターに協力していただいている「お父さんのコーヒー塾」、このようなイベントがとても好評をいただいております。

実は昨日、恒例の餅つきを行いました。幼稚園児から上は70代まで70名以上の方が集まって、本当に初イベントで大盛り上がりでした。ああ、幸先が良いなと嬉しく思っているところです。

このような活動の広報は、事務局長が作ってくれている「マルシェ通信」というものを回覧しております。

この餅つきの案内を出した通信は55号でした。もうそんなにもなるのかと少しびっくりして、感慨深いものがありました。

### 交流を大事に、スタッフも楽しんで

お蔭様で年々スタッフが増えております。私たちは全くのボランティア団体ですけれども、参加してくださった方が、次は私たちもお手伝いの方に回らせてくださいと言って、年々増えております。

その交流をととても大事にしている、そこで出た話、こういうことがあったら良いよね、これやりたいじゃない、そういう意見を大切に、それを形にするようにしています。

そして何よりも、まずは私たちスタッフが楽しむということを大事にしています。

時には、これは多くの人と分かち合いたいなというイベントを企画することもあります。昨年と言えば、『人生フルーツ』という映画の上映会を行いました。

これは、人生は段々美しくなるというテーマの二人のご高齢のご夫妻のドキュメンタリーでした。

富谷市も賛同して下さって、当日は市長さんと副市長さん、教育長さんが駆けつけて下さり、ご挨拶もいただきましたし、長寿福祉課の方から先ほど門間さんのお話にもあったとおり、街かどカフェと繋



いでいただいて、当日出前カフェをしていただきました。

映画の感動を美味しいコーヒーをいただきながら話し合う場を作れて、本当に素敵な時間でした。ありがとうございました。

### 温かい居場所づくり

今年も実は映画の上映を企画しております。今年は、『いただきます』という映画です。これは九州にある保育園のドキュメンタリーの映画です。

私、3回映画館に見に行き、3回とも泣きながら見た素晴らしい映画です。

富谷市は昨年、子どもにやさしいまちづくり宣言をしました。

それで私たちも市民として、子どもたちにやさしいまちづくりって、どうしていったら良いのだろうと考え、実践していきたいと思っています。

その第一弾をこの映画上映と思っています。映画の内容から、これは子育て支援課の方と主に話し合いを進めておりまして、映画の日には3月4日、そして場所は、子育て支援センター（とみここ）で決まっております。

映画のチラシを用意して後ろに置かせていただきましたので、興味ある方はどうぞご覧いただきたいと思います。

このように、なぜ私たちはこの活動を始めたのかという動機の思いをずっとぶれずに大事にしながらも、富谷市とも良い関係を築いて行きながら、温かい居場所づくりの活動を続けていきたいと思っています。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

#### <佐々木先生>

ありがとうございました。震災を契機に、多くの活動が誕生していますが、成田マルシェもその一つなのですね。

何かを始めたいという人は多くいますが、なかなか一歩を踏み出せない。そうした時、震災は一つのきっかけになっていたのだと思います。

成田マルシェは、いわゆるマルシェ形式での対面販売だけでなく、餅つきで多世代の活動を展開したり、映画の上映をしたりと、活動の幅が広がっています。

先ほどの講義の中で、つながりが大切であり、それが共創につながるという話をしましたが、既に先ほどの鷹乃杜町内会の街かどカフェと連携して、カフェを展開しているということでした。

ここから、多世代を含めた協働には、多様性を理解し、それぞれの良さを引き出せるようなコーディネートの重要性を伺い知ることができます。

次は、NPO 法人 SCR の代表 村上幸枝さんです。

## NPO法人SCR 代表 村上 幸枝 さん

皆さんこんにちは、NPO 法人 SCR の代表の村上幸枝と申します。



### NPO法人設立のきっかけ

まず、最初に SCR って何だと言われるので、SCR の S というのは、どんなことがあっても笑顔でいようというスマイルの S を取らせていただき、C はチャレンジの C を使って、R はリレーション、人と人が繋がりながら、この活動をやっていこうというところから、NPO 法人 SCR と名付けました。

私たち NPO 法人 SCR の発足のきっかけは、11 年前になりまして、自分の可能性を試したいであるとか、何かやりたいという一般の女性が集まりまして、そこからがスタートです。

その活動をしながら、もっと地域に根ざして、もっと多くの人に喜んでもらえることがしたいなということから、自分たちの手で、NPO 法人というものを申請から立ち上げまで、自らやりました。

1 年かかったのですけれども、そのお陰で、みんなで作った NPO だからこそ、思い入れもあるし、何よりも何があってもへこたれないみたいな、そういう根性がついた経験をさせていただきました。

### まずはやってみっぺし！ ～4つの活動～

法人になっても、何から手を付けて良いのかわからなかったので、「まずはやってみっぺし！」を合言葉に、こちらにある4つの活動を軸に進めてまいりました。

一つは、自然再生活動と言いまして、身の回りの富谷の自然を守りたいということで、少し女性ではハードルが高い林業、林業女子を作り、大亀山森林公園という富谷を代表する、緑の綺麗なところを間伐させていただいたり、お掃除をさせていただいたりとか、そういうことをしました。

また、黒川郡地域を主に、桜の再生活動などをさせていただいたり、少し女性ではハードな仕事もありますが、まちを元気にしたいなという思いでやっております。

そして、木育活動、宮城県産の間伐材を活かしたい、それは林業をしながらも、何かこの木を使って、子どもたちとかみんなに木に触れてもらいたいなという、そういう想いで、木育活動をしています。

そして、食育、これは私たちの健康には欠かせないもので、食を通して健康を育むという考えのもとで、富谷の郷土料理であったり、地元の素材を活かした活動を行っています。

そして、健康増進活動、自分の元々持っている治癒力を高める目的で、心と体の健康を育む活動を行いコミュニティづくりをしました。

もう一つ、自然再生活動の一環でミツバチを育てようということで、今、富谷市役所の屋上で行っている「はちみつプロジェクト」と同時に、独自でも日本ミツバチを育て、人間にとっても住み心地の良い環境づくりを目指し活動中です。

## みんなに助けをもらいながら

この4つを回しながら、設立当初は名前も知られていない、何の団体だという感じで言われていたのですが、SCRが今年で7年を迎えられたのは、やはり地道にコツコツと、そして諦めず、その中で自分一人ではできないことは、みんなに助けをもらいながら、そして応援していただきながら、というものが無ければ、今日まで続けて来られなかったと思うのです。

今後も富谷市に求められるような活動を共に協働して、地元にもっと貢献できるように、進化していきたいなと思っております。

私たちの活動は本当に一人ではできないので、今日、この日に集まった皆さんとも繋がれたら良いなと思ひ、これからも活動していきたいと思ひます。どうぞこれからもよろしくお願ひいたします。

### <佐々木先生>

ありがとうございました。法人名のSCR、スマイル、チャレンジ、リレーションという意義があり、まさに協働に必要な要素だと思ひました。

ただ、決して協働を知っていたわけではなく、村上さんたちが活動を開始しようとした際、重要と考えたキーワードがこれだったのです。

ちなみに、富谷市役所では、屋上でミツバチを飼育していて、それがにわかには有名になり、オリジナルブランドのクッキーも作られています。そのミツバチを女性の皆さんが飼育している、つまり養蜂しているということを知っているという方はどれくらいいますか。

### 《拳手》

結構いらっしゃるんですね。屋上で養蜂というと、屈強な男子がやっているのかなと思ひていたところ、村上さんと最初お会いしたときに、びっくりしました。「まずはやってみっぺし!」、活動を始める際、とても重要なキーワードです。

次は、アトリエジーナ 代表の富樫花奈さんと企画部の高橋尚子さんです。



SCRさんのご協力を  
いただいて、参加者の  
皆さんに提供した  
「富谷産のはちみつ  
レモンティー」も大  
好評でした。



## アトリエジーナ 代表 富樫 花奈 さん



よろしくお願いします。

私は2016年の冬に富谷に引っ越してまいりまして、それまで東京の方に住んでいたのですけれども、8年間くらいITのエンジニアとして働いていました。

その時に、第一子が小さかったのですけれども、仕事と子育ての両立といった感じで、誰も頼れる人がいないところで、仕事をしつつ東京で働いてきて、その子育て世代の人が集まれるところを作りたいなということで、成田に引っ越してきたことをきっかけに、自宅の一角のログハウスを開放して、先生たちを呼んでワークショップをやったりとか、子連れの方もどうぞと、私が面倒見ているのでという感じで、お子さん連れの方を中心に、そういう活動を始めました。

### 地域の子どもたちとともに

そういった活動をしていく中で、地域の子どもたちも何か携われるイベントというか、もっと楽しませるようなことをしたいなというのが出てきまして、ちょうどワークショップに来てくださっていたハンドメイドなどをする先生たちを中心にマルシェというものをやり始めました。

最初は自宅の一角のお庭を使ってだったのですけれども、とって子どもたちが楽しみにしてくださって、一番最初にハロウィンマルシェというものをやりました。

仮装してきてくださいねという形で、子どもたちにお菓子をあげますよ、一緒に何かなりましようと呼びかけて、その後はクリスマスのマルシェをやりました。

それを続けて行くうちに、家の前を通る子どもが、「次のマルシェはいつやるの、すごい楽しかったから次も行きたい」と私に話しかけてくれるようになりまして、もっと続けてみようかなという気が起きてきました。

そんな中で出会ったのが、ふうどばんく東北 AGAIN(あがいん)さんという同じく成田にあるNPO法人さんなのですけれども、そちらのNPO法人さんというのは、食糧寄贈などを受けて、貧困者であったりとか被災した方に食糧を配ったりする団体なのですけれども、そのふうどばんく東北 AGAIN さんとも協力して何かできないかなと。

せっかくお祭りみたいなことで人を集めるなら、何か地域のためになるようなこともしたいなというので、ふうどばんく東北 AGAIN さんと何かできないかなという形で始めたのが、「みんなのマルシェ」というマルシェでした。

そのマルシェで来てくださった方には、フードボックスという大きい入れ物があるのですけれども、例えば自宅に残っているスパゲッティなどの乾麺であるとか、缶詰であったりとか何でも良いので持ってきてくださいという形で、そのマルシェを使って集めるという活動も呼び掛けてするようになりました。

そういうマルシェをしていくうちに、地域の子どもたちというのが、ただ私としては楽しませたいというのがあって始めたことだったのですけれども、子どもたち自身が中に入って一緒にやりたいとか、手伝いたいというように段々なってきたのですね。

それで私たちは、かき氷のお店などを出していたのですけれども、自分で削って食べたいみたいな感じ

で、子どもたちがどんどん中に入ってきて、「ねえ、これ並べればいい?」「これスプーン挿せばいい?」みたいな形でどんどん手伝ってくれるようになりまして、子どもたちって意外と何か楽しむということよりも、大人と一緒に何かやりたいのだなと思うようになりました。

そんなきっかけがあって、「こどもマルシェスクール」というものを昨年、一回やってみました。

そちらにおられる佐藤さんに協力していただいて、お金の話とかも少しやっていたのですが、子どもたちが自分で最初から考えて、どんなことをしたいのかというのを聞きだして、その中で例えば、かき氷一緒に売ってみようとか、スライムを作ったら売れるかもしれないというのを、子どもたちと一緒に考えて色々やっていく活動というのをやりました。

### 子育て世代を支援したい

そんな中で、更に、私は成田に住んでいるのですが、成田の一丁目というのは特に富谷市外や宮城県外から集まっている方がすごく多くて、私が東京に居たときのように、子育てを手伝ってくれる身内がないなどという、お父さんお母さんがとても多いまちなのですね。

そういう方たちを見ていく中で、それでもやはりお母さんも仕事をしなければならない、お家を留守にしなければならないという用事があったりとかで、子どもたちが孤独というか、一人で家に置いて行かれる機会とか、「あれ、今日お母さんいなかったの?」みたいなことが多々あって、子どもたちのためにも何かしなくてはいけないな、何かもっと集える場所を作らなくてはいけないなというのがありまして、今回、こども食堂というか、子どもだけではないのですが、親子を集めた親子食堂というのを今年の1月に初めてやってみました。

その食堂自体は、成田地域のグリーンステーションさんというお花屋さんなどにも協力していただいて、野菜などを寄附していただいて食材を集めて、お子さんはタダでどうぞ、お母さんたちだけは例えば紙皿とか買わなければならないので300円だけいただきますという形で、第1回目は少し材料の予測がつかなかったので予約でお願いしますという形で集めたのですが60名ほど集まりました。

ふうとばんく東北 AGAIN さんの場所を借りて今回はやったのですが、ふうとばんく東北 AGAIN さんの場所というのは全く調理設備がない場所だったので、皆さん手伝ってくれる方は、ボウルと包丁とまな板を持って来てくださいという形で皆さんに手伝っていただいて、お母さんたちは昼ぐらいから来ていただいて、夕方には子どもたちと一緒にご飯を食べられるように、もうずっと夜まで働きどおしで手伝っていただきました。

でも、何かそういう温かい場所があるのが良いので、これからも是非続けてくださいという声であったり、今回、見に来てくださった方でも、うちの施設でもやって欲しいというお声も頂いたりして、やはりそういう需要はあるのだなと、これからも続けていかなければいけないなと思いました。

私たちは、メインは子育て世代だったりするので、地域のお年寄りの方だったりとか是非色々な方に関わって欲しくて、私たちだけでは作れない料理とかも、そういう方が関わってくれて監修して下さることによって出来るかなということもあるので、これからもっと他の世代の方も加わっていただいて、色々活動を広めていきたいなと思っています。よろしくお願いします。

すみません少し一人で心細かったので、一緒にやっていたら高橋さんに来ていただきました。

### <高橋さん>

すみません、私は残念ながら富谷市在住ではないのですが、富樫さんと同じ子育て世代だということで、私も小学校1年生の子どもを育てながら、私自身はハンドメイドの作家活動をしています。

その作家活動をする中で、ママ作家がたくさん活躍していることを知って、それでママ作家の活動の場所と子どもが安心して集える場所のマルシェづくりということで、富谷ではないのですが、マルシェを主催させていただいたりして、そんな中で富樫さんと出会いました。

それでやはり、何かをしたいというママたちの力というのは本当にすごくて、でも自分では何を始めていいのか分からなくて、それを支援する場というか、そういった場づくりでもあると思うので、今、始まったばかりなので、何もまとまっていないのですが、アトリエジーナ企画部として、何か色々なことができたらいなと思います。

そして今回のセミナーの協働というのが、まさに富樫さんと私がしていることで、子育て世代として、子どもたちにより良い環境づくりをしたいという志が同じで、共に動いているということで協働だなと思いました。

よろしくお願いします。

### <佐々木先生>

ありがとうございます。屋号のアトリエジーナというのはどういう意味なのか、教えていただけますか。

### <富樫さん>

アトリエジーナは、『紅の豚』というジブリの映画があるのですが、そこにジーナさんという方が出てくるんですね。

ホテルアドリアーノという海の中にぽっかり浮かんでいる場所なのですが、そこは色々な方が集うという意味の場所であったりして、更にそのホテルアドリアーノの界隈では、敵味方というものとは戦ってはいけないという決まりがあります。

そういう意味で人が集える場所という形で、アトリエジーナというのをそのままいただいたんですね。

### <佐々木先生>

アトリエジーナ、お話を伺って、コンセプトが理解できました。コンセプトがしっかりしていると、共に活動するメンバーや協働相手にとっても理解が進みます。ですから、団体や法人に名称をつけることはとても重要なのです。法人も法の上では人であり、まさに命名するということですね。

首都圏からきたからこそ見える地域の課題は多くあります。そこでまず自宅の一部を開放した、適正規模でのチャレンジですね。そうすると、子どもが集まってきて、次々と活動が展開していく。

フードバンクを展開する NPO 法人との連携、とみやわくわく市民会議で出会った税理士の佐藤さんと子どもビジネススクールを開始したりと、まさに集いの場が起点となって、協働が生まれているんですね。安心して集える場の重要性、これも重要な協働の要素です。

次は、フットサル教室 LosEncantadoresF.S.の代表 山下咲子さんです。

山下と申します。



### 障がい者の実情

私は障がいを持った息子がおりまして、転勤をして色々なところを回っておりまして、引っ越してきたときは富谷町でしたね。障がいですから色々な手続きをするのですが、その中で、息子が非常に体を動かしたいということで、その当時に担当してくださった保健師さんに体を動かす場所を提供して欲しいという話をしましたら、もう本当に即答で「ありません」と言われました。

町の時代でしたから仕方が無いのかなと思いながらいましたけれども、障がい者という中では括りがあり、障がい者はこの程度というのがありまして、障がい者って本当に幅が広いんですね。

つまり本当に重度の方は非常に大変な思いをしておりますけれども、いわゆる軽度と言われる、ある程度は自分でできるのだけれども、なかなか健常者の中ではちょっと生活し難いというのがありまして、その辺の障がい者の幅があることを、ここで皆さんに分かってもらいたいというのが最初のことでございます。

障害を持っていると、色々な学校で支援学級、支援学校というところがあるのですが、そこを出た後、就労も大変ですけど、生活そのものが非常に希薄なんですね。言葉で言えば、本当に行くところが無いのです。

家でウジウジしていたり、土曜日曜なんか本当に、まあ学校行っている間は、学校の中で色々なことを先生方にやっていただいていますけど、いざ家に入るとほとんど親子、ずっと私もこの何十年間、親子という中で生活していました。

町に来たときに、どこか行きたいのですけれどということで、「ありません」と言われたことが非常に残念でした。その時に保健師さんにフットサルと書いてありますけれどもサッカーをやりたいのだということを伝えました。

サッカーはやっていませんということで、仙台市、隣の市の方に紹介されましたけれど、そこに行くのにもその当時、富谷では障がい者に対しての支援の中に、交通費の補助みたいなものは無かったですね。ですから仙台市にサッカーをやりに行くのにも、すごい費用を掛けてというのが現実がありました。

市になって交通費補助の制度が出来て本当にありがたいと思っております。

その時に担当してくれた保健師さんには、障がい者は毎年更新する色々な制度があるのですが、その制度の度に何年間もやる場所が無いということを常に伝えていたのですね。

### 企業との出会い

それを聞いていてくださった保健師さんが、ある時、本当に10年近く経ったときに、つい最近、実は1年前ですが、こういうお話がありますということを言われましてお聞きしましたら、ヴォスクオーレ仙台さんという、成田のドーム型のフットサル会場がありますね、あそこの方々が、支援してあげても良いのでやりませんかというお声を、市からヴォスクオーレ仙台さんの方に話をしてくださったのですね。

その中に先ほど協働というのがありましたけれども、東北福祉ビジネスさんという企業の担当の方もボランティアで良いので参加しますよということをお願いしまして、私はやりたいということだけを言葉に出したけななですけれど、そこを繋いでくれた市の保健師さんが合わせていただきまして、実際、ちょうど1年前の1月にこの寒い中、でもあそこは寒くてもドームがありますから雪が降ってもフットサルができるのですね、そういう中でスタートしました。

障がい者の方々は本当に体を動かすこと、それから声を出すことというのは非常に狭められていて、本当は地域の中で色々とフットサルやサッカーなどのサークルに入ってやりたいのですが、やはり少し力不足のために、皆さんとうまくやっていけないというのが、そこが障がいといえば障がいですけど、そんなことがあります、まず、やってみましょうということで、やり始めました。

最初は体験ということで、月に1回だけなのですけれども3ヶ月、1月、2月、3月とやらせていただきました。

### 新たな活動を開始

その中で、そのまま終わってしまうのはすごくもったいない、やらせて欲しいという希望がありまして、では4月から自分たちでやりましょうかということで、たくさんの方に参加していただきました。

いわゆるフットサルという教室となっていますけれども、教室の中にやはり指導する方がいなければいけませんし、私たちだけではできませんので、その東北ビジネスさんという方が間を持っていただいて、フットサルのチームのヴォスクオーレ仙台さんの選手の方々が教えてもいいですよ、指導してもいいですよというのを、本当に声を出していただきまして、これはやらないわけにはいかないということになりました。

子どもと言っても、私も先ほど先生のお年を聞いてびっくり、うちの子とも一緒なのです。

そういう、つまりどこも行くところが無いおじさんだけ対象では無い、小さいお子さんから年齢いくつでも構いませんということでスタートとしたのが、このフットサルの教室なのです。

その中で、先ほどありました企業さんにも何かお手伝いしてもらえないかというお話ありましたが、本当に私たちも企業ベースに乗っちゃいけないなということで身構えていましたけれども、意外や意外ボランティアで結構ですということで、声に出したことがこんな形で教室という形になるとは、本当に思っていませんでした。

### 続けて行くことのむずかしさ

ただ、その中でやはり続けていく上で、非常に難しい問題も今、抱えております。

何が大変かと言えば、あそこの屋根の付いた会場を借りるのにやはり費用が要るのです。その費用の工面であったり、障がい者はもちろんチームが少ないものから、それを自分たちで支払うとなると非常に難しい問題とか、あそこまで通ってくるのにどうしても誰かの手助けが必要だったり、色々な面で問題は抱えていますけれども、まずは続けていくことの大事さを私たちは本当に感じながら今、やっているのです。

今そこで、月1回なのですけれども、本当に皆さんに助けられてというか、協働と言っているのかな、



支援という言葉が好きではないという当事者の方が居ます。つまり障がいを持った人が、支援ではなくて本当に協働で、これから続けていければ本当にありがたいなと思っています。そんな活動をやっています。

### <佐々木先生>

ありがとうございます。

課題に気づいたときに、まず行政に尋ねてみたところ、「ないです」と返答であったということでした。

行政の対応は、協働を考える上でも非常に重要になってきます。

ただ、行政も万能ではなく、またそれぞれのセクターにおいて、活動範囲や得意分野は異なっており、またそれぞれに制限は当然あることを認識しておく必要があります。

協働の重要性は理解しているけれど、その度合いは協働によっても、それぞれの事例によって違います。

そのため、多くの自治体では、協働の手引きを作成する際、山岡義典さんが作成した、協働の領域の図を多く掲載しています。

今回の事例では、時を経てこんな団体がありますよ、という紹介があったということでした。

やはり行政の一言はとても重要だな、とあらためて思ったところでした。

市民活動・市民協働の後押しという行政の役割もあります。まさに双方に時期が到来した、と聞いていて感じたところでした。

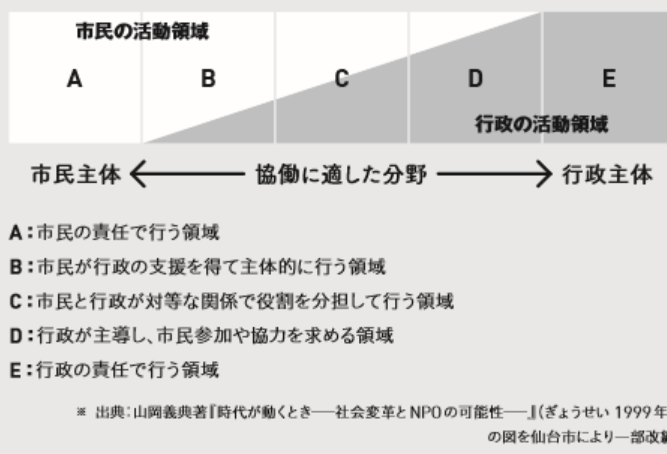
まちのことは、行政に相談にいけば解決するという認識は、主に高度成長期の一時期のことだったと考えた方が良いのかもしれない。

もちろん行政で解決できる事柄も多くあることは事実です。

大事なのは、フラットな関係性での意見交換ということになります。

むしろ、出来ないと言われた時に、そこに活動のチャンスがあると考え、思考がこれから最も必要になってくるのかと思います。

図2:協働に適した領域(市民と行政の場合)



資料提供: 宮城大学 准教授 佐々木 秀之 氏

<佐々木先生>

事例紹介の中で、多くのキーワードを頂きました。

たとえば、カフェやマルシェという活動を幾つかの団体が積極的に取り入れていることがわかりました。それは人と人とが繋がる、有効な手段となっているようです。繋がる場が求められているからこそ、カフェやマルシェが多く実施されており、そこに人々が訪れるのですね。

また、活動を今後どう継続していくのか、こうした話題もありました。

もちろん町内会活動のように、すでに何十年と続いている活動もあります。

ただ、そこにおいても多く課題は発生しているものであり、先ほどの町内会の話にもありましたように、旧来の取り組み加えて、新たな取り組みを取り入れることで活性化が図られています。

もちろん続けることだけが目的ではなく、NPO や市民活動の概念に、組織のミッションというものがありますが、ミッションが達成した時点で、活動のゴールとする、といった考え方もあります。

それでは、具体的に期間は定めないとして、活動を続けていくのに必要なことは何か、そのエッセンスを、一言ずつお話いただきたいと思います。

その後、フロアーの皆さんとの交流タイムに入っていきたいと思います。

<門間さん>

続けるというのは、現在に至っているのですけれども、やはり無理をせずですね、自然体で要するに繋がるということですから。

子どもたちも今は地域の教育力という表現が出てきています。

大人も隣近所、この部分が非常に大切なと思っていますね、何かを作ってそこに集めるというよりは、やはり基本的には隣近所がという部分が非常に大切だと思います。

<佐々木先生>

ありがとうございます。無理をせず、まずは隣近所からということが大切とのことでした。

<増田さん>

本当に門間様のおっしゃるとおり、まずはやっている人たちが無理をしないということが大事だと思います。

それだけではなくて楽しむということ、楽しいとその雰囲気伝わりますので、先ほどアトリエジューナさんのお話にもあったとおり、子どももやってみたいとなりますし、そうすればどんどん低年齢の子も参加してくれますし、もう仕事を定年した人たちも、この場に来て自分の役割があれば、嬉しくなってまた次回も行こうというようになります。

ですから、その場がまず無理せず楽しい場であるような雰囲気を作っていくことが、大切なと思います。

<佐々木先生>

無理をせずに加えて、楽しむ場であることが重要ということですね。

<村上さん>

やはり自ら楽しむということが一番大事なのではないかなと思います。

うちの父親に嫌々やるのだったら止めろとよく言われるのですけれども、そこが私の中に、やはりやるには楽しんでやらなければ続かないというのが、やってきてみて思います。

<佐々木先生>

楽しむことについて、自らがまず楽しむことが大事というキーワードをいただきました。

<富樫さん>

私も皆さんと同じように、やはり続けることは楽しんで、更にそれを巻き込むというか、皆さん自身が楽しめるような巻き込み方をするということがすごく大事だと思います。

もちろん自分が無理してではいけないことですし、私もまだ小さい子がいるので、その子をほったらかしにしては続けられないことだったりするので、自分のやれる範囲というのを考えながら、今、どう続けていこうかということを考えている途中ではあるのですけれども、やはり自分が楽しむことで、周りに人が集まってくれて、その人が集まることで、自分一人ではできないことができるようになるということが、すごく大きいことだなと思っています。

<佐々木先生>

まず自身が楽しんでいることが大切、これも重要なキーワードです。そこに人が集まり活動が展開していくということですね。

<山下さん>

続けていく難しさは非常に、障がい者というのはこの辺に壁があるのですけれども、そこを何とか乗り越えていきたいなとは思っております。

けれども意外や意外、こちらが胸を開いたら意外と助けてくださる方が、本当に多いのも分かりましたので、私たちがこもらないで、大きくオープンにしていきたいと思っております。

<佐々木先生>

活動を展開していく上では、自分から心を開くことが大切とのメッセージをいただきました。

パネラーの皆様いただいたキーワードは、どれも活動を継続するために重要なエッセンスであり、それらは全て関連していることを学びました。



### <佐々木先生>

これより、ワークショップの時間に入ります。

パネラーの皆様には、それぞれのブースにご移動いただき、ファシリテーターの進行にしたがって、ディスカッションを進めていきます。

フロアーの皆様は、各自の判断で、さらに話を聞いてみたいと思うブースにご移動ください。

1回あたり10分の時間をとります。これを3回繰り返します。

話の内容はホワイトボードに記録していきます。

ちょっと違うかもしれませんが、ワールドカフェのようなイメージでお考えください。

## ワークショップで感じたこと

### <佐々木先生>

ワークショップいかがでしたか。

参加者の皆様も意見交換する中で、多くの事を学ぶとともに、実は私の地域ではもっとこんなものがあるよ、うちの団体ではこんなことをやっているよ、など、自らの地域や団体への熱い思いもこみあげてきたのではないのでしょうか。

その一方で、いや待てよ、うちの事例に、今日の話を活かして、こんなことをしたら面白いのではない

かな、といったアイデアも浮かんできた方もおられると思います。

今日は、町内会活動を中心となって展開される、地域コミュニティの担い手に加えて、新たにそれぞれの思いのなかで活動を開始した、いわゆるテーマコミュニティでの活動を展開する皆様が、混じりあいながらのワークショップでした。

こういう場が重要だというお話がでておりましたが、まさにその通りですね。

お互いを尊重しながら、良い互恵関係が構築されていくことが、継続されるまちづくりの要因になってくるのではないのでしょうか。

それでは、最後にパネラーの皆様から、振り返りとして、参加者の皆様と話をしてみて、どんな感想を抱いたかということをお話いただきます。

### <門間さん>

たくさん出たのですが、皆さん、町内会は先輩の方たち、地域で活躍している方なのですが、地域によっては違うという部分はあるのですが、基本的には、私は皆同じだと思っています。

人が集まる、最初の出発ではなくて、終の棲家とした部分ですから。でも少しお話を聞いて、「会員さんにならないんだよ」という部分や、「今の若い人たちの考え方が、そっくりそのまま引き継がれている」という部分、今、子ども会が地域の中で、要るの要らないのという論争になっています。役員になりたくないからでなくて、なんなのかなと。

ですから町内会も会員になりますか、なりませんか、という問いかけは、鷹乃杜はしないです。当然という考え方も無いのですが、一つの集団の中に入ったら、やはりそれは、一緒に交わるということ、相手の方も、知らない土地に行ったら、知るということが大切だということを基本として、私どもの鷹乃杜では会員さんが増えています。というのは、新しい方が増えてきて確実に会員さんには100%なっていておられます。そこところが不思議だなというようには、この頃思ってきているのです。

なぜ、「うん」と言って会員になってくれるのかなと。それはやはりコミュニケーションといますが、相手の方も今の若い人たち、今うちの方では30代の方が100%越してきております。

空き家もあるのですが立地として良いのか、4号線沿いで大型店や病院群もあるので、非常に多くの方がお家を建てて引っ越されております。

その中で、やはり会員という問題が出てくるのだろうなと思っていましたが、今のところは嬉しい悲鳴なのです。ですから基本的にその方たちが、その土地に終の棲家として求めて来られるわけですから、その人たちも知る必要があるように感じます。そうして一番最初は入って来られると思います。

その時に手を差し伸べるというのが町内会だと思いますので、受け入れ体制と入ってくる方、迎える方というのは非常に神経を使いますが、その辺が地域づくりの難しいところかなというのは、先ほど質問をいただいて感じたところです。

ただ、これにはめげずにはないのですが、あたたかい地域づくりというのは、人と人とが挨拶ができるまちにしていきたいなと思います。よろしくお願いします。



### <増田さん>

質問を受けて、そのとおりだなと思ったことをお話させていただきたいと思います。

私たちは主に町内会館を使わせていただいております。町内会の方にも大変ご協力ご理解をいただいているのですが、「どうやってそのように協力関係をいただいているのですか」というご質問でした。

それで、ふと大事なことを思い出しました。最初に立ち上げるときに、成田にある3つの町内会、そのすべての町内会長さんのところに足を運びまして、これからこのような活動をさせていただきたいと思います、どうぞご協力をお願いしたいのですと言って、賛同者というところにお名前をいただいて、それを町内回覧で回したところから始めました。

ですから後出で、こういうのをやったから賛同いただけませんかとしたのではなくて、最初にご理解をいただくという手順を踏んだということ思い出しました。

質問いただいた方が、そこが大事だと思うよと言ってくださって、本当にそのとおりだなと思いましたので、この場でお伝えさせていただきました。



### <村上さん>

うちの方の質問は、まず、「林業で高齢化になったらどうすんだ」というのが一番最初にいただいたのですが、実はこの林業をしているのは、ほぼ女性でありまして20代から60代までおります。

すべて林業に特化しているわけではなくて、食事をしたり草集めなどもその中にありますので、すべて山だけではないんだよというお話をさせていただいて、そしてどうやってその人たちを集めるのかとか、あと町内会の会長さんが多かったものですから、やはりその会に足を運んでもらえるためにと考えていらっしゃるのだなと、皆さんと交流を通して感じました。



### <富樫さん>

私の方は質問というよりは、私がたくさん、今日勉強になったことが多くて、私は、個人で突然ログハウスを建ててやりますと言ってネットで人を集めて始めたところだったのです。

まったく増田さんと逆を行くというか、何の承認も得ないままに、こじんまりととりあえずやってみようみたいな感じで始めたところがあったので、町内会をどう巻き込んだらいいとか、例えば公民館だったり公的な施設をどうやって借りたらいいかというところを、まったく今まで考えずに突き進んできた部分がありました。

そういうところを、今、成田の連合会の会長さんだったりとか、菅原さんにこういうことしたら借りられるよって、こういう人と少し話すしてねという話を今日は聞くことができ、更に門間さんの活動の街かどカフェさんだったりとか、子ども食堂に呼べるかなと思ったりとか、増田さんのまかない付き寺子屋だとか、もしかしたら一緒にやったら色々広がるかもしれないとか色々思ったりして、とっても私が勉強になりました。ありがとうございました。



### <山下さん>

私も今、同じようなことを言われまして、つまり「広報する前に、お知らせの場合に、町内会を大いに利用してください」と、それから市議会議員の方はじめ、「どんどん、皆に伝えていかなければ、今日初めて知ったよ」という方がたくさんいまして、本当に私たちが知らせる力が無かったのだと、今日改めて分かりました。引き続き、フットサル教室やっていきますので、どうぞよろしくをお願いします。ありがとうございました。



## 協働って実は難しい ～無理なく、楽しく、巻き込みながら～

### <佐々木先生>

ワークショップでは、一步踏み込んだ議論ができたように思えます。

本日の話の冒頭で、協働は時に難しく捉えられることがあると話しました。私自身も本の中で、協働は難しいということを書いており、コーディネートが不可欠であると述べています。

一方で、本日の講座では、協働の可能性の一端が垣間見えたように感じました。

協働という概念も、こうした皆様の活動によって、また更に進化していくものと思われます。

地域には多くの難問があることも事実です。そこで私たちは何をしていけばよいのだろうか、すでにその取り組みが始まっていることを確認することができました。

答えはそう簡単に見いだせるものではなく、時に見いだせないこともあるのかも知れません。

そんな時こそ、今日の幾つかのキーワードが大切になってくると思います。

「無理なく」、「楽しく」、「巻き込みながら」。

その結果として、協働が成り立っているというのが、良い協働なのかもしれないと感じたところです。

《ワークショップで出された意見》

若い世代の参加  
 「入る」「入らない」ではなく  
 手助けをしながら  
 町内会に参加している人からの  
 手助けはどう行っていくか  
 例) コミ班を新しく作る場合の例  
 ↳ 班主は2人ある  
 新班の作りはどうして、そのか  
 ↳ 役員の方と相談して

外国人の方  
 町内会の活動の説明  
 行事の仕組みを詳しく紹介

・会館清掃に50名参加  
 ↳ 掃除をしたからコミュニケーションを図ることになる。  
 参加しての方に参加してもらい、参加してない方からは  
 協力を要してもらわない。(それぞれの利害があるetc)

・町内会で貸庫図帳を毎月行っている。  
 ↳ 図帳が貸主に貸庫金を活用

鷹乃杜町内会 門間さんグループ

人集め 40代、50代、60代、70代男性も  
 HP 3つの町内会の真ん中  
 場所 成田台T日会館  
 会費 会長さんから集めた  
 登録者 40(実際10人) 行ける時間帯だけ  
 千円(回数)7ヶ月に1回 行けるように  
 現在51号

会費  
 3000円の手子屋  
 助成金(地域福祉活動費)  
 あこがれ会 信託高のワーク?  
 制服・体操着 HIP等検査  
 町内会館倉庫を利用 → 町内会長さんに相談  
 提供したい人もいます 賛同者にもとらえた

映画上映

成田マルシェ 増田さんグループ



- ・ SCRに在るまでの過程
- ・ 活動内容
- ・ " の資金
- ・ メンバー構成 (主メンバー 女性15名<sub>(ワーク)</sub> + イベント毎に 志願者)
- ・ イベント告知方法と集客について

NPO 法人 SCR 村上さんグループ

## アトリエジータ

- ・ 楽しいことをやっている←人が集まる
- ・ 共働き家庭多い
- ・ 始めて1年くらい、継続が課題
- ・ 成田マルシェとつながれるかも。
- ・ 出張親子食堂を予定

アトリエジータ 富樫さんグループ

フットサル教室  
代表 山下さん

スタッフ 4人  
ボランティア 10  
生徒 15 } 富谷以外

運営継続方法

- 助成金なし
- 法人化 検討中
- 寄付 検討中
- 連係 町内会
- 情報共有 月助成金

提案

Los Encantadores. F.S. 山下さんグループ

- 素晴らしい事例を沢山の町を参考になりました
- 富谷市の各行政にも世帯数(居住人口)をとりあてますが
  - それぞれ実情を聞き、町内会活動を展開している(すてたものじゃない)
  - おもしろいも、世帯数が少ないと、やっぱり大変
- 等々意見があがりました。
- 今後とも実情に合った活動と継続していきたい

有志グループ

## 【富谷市副市長 高橋義広】

長時間お疲れ様でございました。

冒頭、市長から、本日のパネラーが全員女性ということで、女性活躍という話がありました。

私は、この会が始まる前に出席者の方も女性が多いだろうと思っておりましたが、出席者の3分の2が男性ということであり、富谷の場合は、男性も協働の活動に対して非常に意識が高いのではないかと考えております。

先生から冒頭話がありました、市民協働の定義は、荒木昭次郎先生が1990年の書籍に最初に書かれたということです。和暦にすると平成2年であります。

最近、いろいろな場面で「平成最後の」ということが言われておりますけれども、平成の時代、市民協働というのが色々な意味で広がってきた、考え方が成長してきた時代だったのではないかと思います。

平成という時代が変わっていく中で、市民協働というあり方も、どんどん変わっていくということなのだろうと思います。

本日のセミナーでは、色々な事例紹介がありましたが、それを受動的に受け止めていくということではなく、本日集まった皆さんは、普段の活動で悩みを抱えている方が実際にいらっしまったのではないかと考えております。

本日パネラーをなさった方も非常に勉強になったという話もありましたけれども、参加いただいた方も色々勉強となったことや、悩みを深くされた部分もあったかと思えます。

これは我々行政も同じでございます。市民協働をどうしていくのか悩みながらも進めていかなければならないと思えます。

何か悩みがあれば我々にも気軽にご相談いただければと思えますし、我々の方からも正直に難しい部分ですと悩んでいる部分を皆様にも還元しながら、より良い形にしていければと思っております。

市民協働のまちづくりは、総合計画の中で掲げているだけではなく、行政改革の中でも一つの柱としております。

住みたくなるまち日本一を目指す富谷市としましては、行政だけではなく市民の皆様と一緒に歩みを進めていかなければならないと思っておりますので、ぜひ皆様のご支援ご協力も併せてお願いできればと思えます。

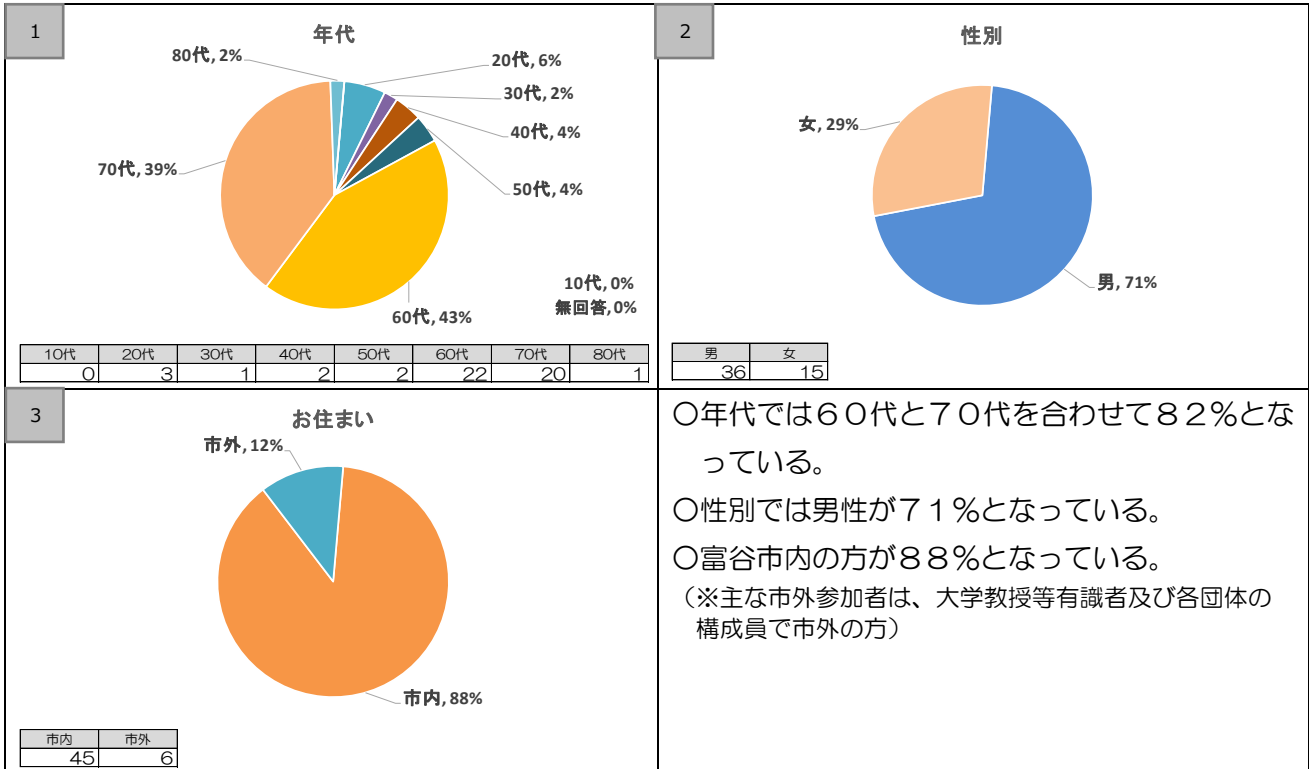
最後に、本日お忙しい中、講師をお引き受けいただきました佐々木先生、それからパネラーの皆様へ感謝を申し上げて、閉会の挨拶とさせていただきます。



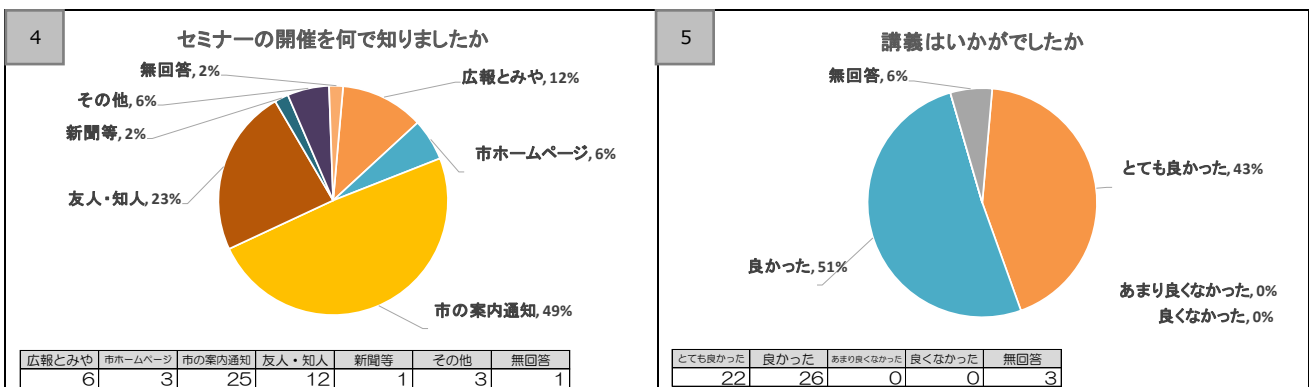
## 7 参加者アンケート

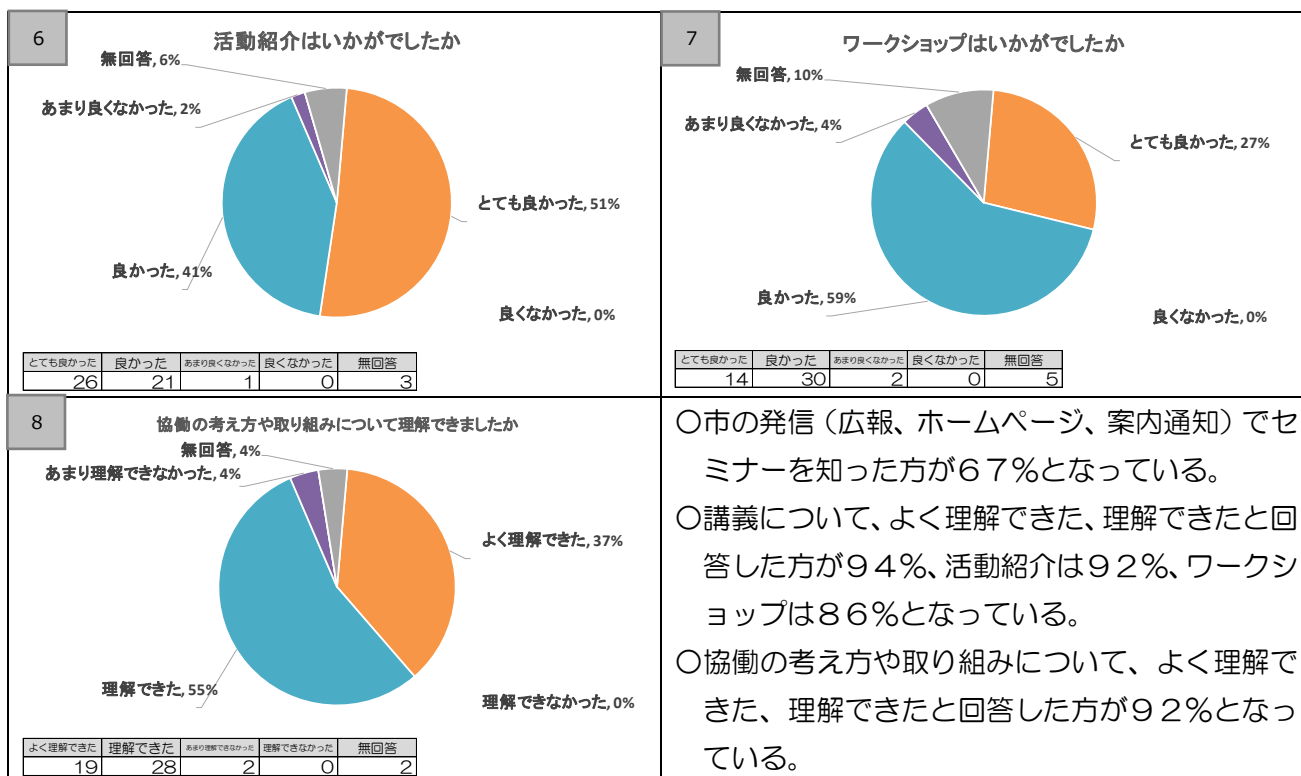
参加者数	63名 うち講師1名、パネラー5名、一般参加者57名
回答人数	51名
回答率	89.5%

(1) ご自身についてお聞かせください。



(2) 本日のセミナーについてお聞かせください。





9 セミナー全般についてご意見・ご感想等ございましたら、ご記入ください。

とても勉強になりました。

多くの活動が紹介され、初めて耳にする事を得て、私の勉強にもなっている事と、協力に行く事の大切さを更に感じられた。

活動紹介で色々な取り組みを聞いて、多くの方々が色々な取り組みをしていることを再認識した。支援又は参加出来ることがあれば行動を起こしたい。

多様化する世代間交流と実際の体験出来るセミナーにして欲しい。

声をあげられない方の声を聴くことが大切。

各種団体の活動を聞くことは大変参考になるし、今何が課題となっているのが分かったのでとても良い。

市民に周知徹底し、もっと参加者を集める必要が重要と考えます。

講義内容、活動紹介共、大変勉強になりました。ワークショップに関しては進め方を前もってお知らせいただければ。

少しは男のパネラーも入れて。

協働について5人の方の事例をお聞きし大変参考になった。特に鷹乃杜町内会の事例を活かしたいと思えます。

住民と行政の「協働」によるまちづくりがテーマのセミナーと考えていたが、ちょっと期待はずれであった。

今回は協働セミナーですが、市の他課が関与するスポーツ、文化、etc.やってもらいたい。 今回のセミナーは非常に良かった。

年1回は実施してほしい。
活動紹介をお聞きして初めての内容もあり、有意義な時間でした。
活動紹介等でとても素晴らしいことを聴く事が出来ますので市民の方出来るだけ多く参加できる様な方法を考えて頂けたら良いのではと思います。
大変良かった。
協働の考え方、あるべき姿を勉強できてよかった、今後の活動にいかしていきたい。
協働の定義を正しく理解できた。
パネラーの発表は良かったが参加者からの意見・質問をもっと出してもらった方が良いと思う。
成田がいきいきしている事を感じました。
楽しく運営が一番。
「市民協働」について認識を新たにしました。
良い例でなく、こういうことに苦勞したなどがもう少し欲しかった。もう少し数値化で話しをしてくれれば定性的だった。対象市民の何%出席しているからよしとする。
パネラーの話は、事前に質問の形態で用意していただいて、もっと理解しやすいものとしてほしい。課題については必ず入れてほしい。
協働は「異なる複数の主体」によるということ、別の視点を与えていただきました。
ワークショップは時間を区切って別のパネルの移動ができるようになっていましたが、1回目以降は決まったメンバーで話していて移動しても話に参加しにくいと感じました。セミナー全般としては様々な意見をきく有意義な時間となりました。
活動紹介に写真があると良かった。

### (3) その他、市民協働の推進などについてご意見等ございましたら、ご記入ください。

市民協働の推進について、いかに市民に周知させるかを重要であると感じました。
旧町内会の考え方 新町内会の考え方の違いがあったと思った。
現段階では、市と民の私たち民がもっとレベルをあげていかないと協働は難しいかもしれません。
本日の時間配分が大変に良。短くもなく長くも、これくらいの時間が充実した。出来るだけ機会を作って頂きます。
富谷市は、未だにまちづくりの基本ルールをつくってない。市民参加（協働）のまちづくりを進めていくためにも、速やかにつくる必要がある。
広報等で各グループの取り組みをPRして下さい。
異なる複数が集える為の実践活動を指導、アドバイスして下さる様な方向性を示して欲しい。
今後も企画して下さい。
建前でなく心を開いて話し合いすれば活路が開かれるということが分かった。
最初に行政の目標ありきでは、市民協働とはいえず、逆に反感を買う恐れもあるので、そのあたりを十分考慮してほしい。
市民活動グループ、NPO、町内会等の交流の場（情報交換会）があれば良い。
市民協働は富谷は先進市町村であり、このまま強力で推進されたい。

知名度がなかなか宣伝が薄いので町内に出張してはいかがでしょうか。

引き続き町内会並びにボランティア活動を通じた協働意識の醸成活動を継続して参ります。

町内会区長たちの活動報告や情報交換もこの様なセミナーで行うものでよいのではと思います。

市民協働事例を富谷市ホームページに定期的に載せて下さい。

いろいろな地区の話をたくさん聞きたいです。

今後も関心を持っていきたいと思えます。

富谷市に市民協働課があるのを封書をもって初めて知った。市民へのアピール、問題の見つけ方、提案はどうするの（一個人が問題課題提起するなど）、どう展開するのかお知らせほしかった。

活動するなかで広報の部分を行政にお手伝いいただけたらと思うことがあります。HP（ホームページ）の運営も今、課題です。イシューではなくチャレンジで市と協働することができればと願っています。

市民協働について見識を広げるためにも今日のような活動に参加したいと思っているので、今後も市民が集まるような機会が継続して開催いただければと思いました。



その他資料（広報とみや掲載記事ほか）

○市内公共施設等配布チラシ

## 富谷市市民協働セミナー

### テーマ 市民協働のまちづくりについて ～協働の考え方と取り組み～

**市民協働って何だろう、どんな活動をしているのだろう？ など  
市民の皆様力を活かす協働のまちづくりについて、楽しく学び、気軽に話し合いながら、参加者同士の交流をしませんか？**

<b>日時</b> ：平成31年1月13日（日） 9：30～12：00（受付9：00～）	<b>【タイムテーブル】</b> 9：00～ 受付 9：30～ 開会 9：35～ 挨拶 活動紹介 休憩 10：35～ ワークショップ 10：40～ 11：50～ まとめ 12：00 閉会
---	--

**場所**：富谷市富谷坂松田30番地  
**富谷市役所 1階 市民交流ホール**

**対象**：富谷市民

**【講師・ファシリテーター】**  
公立大学法人 宮城大学 事業構想学部 准教授 佐々木 秀之 氏  
（プロフィール）  
仙台市出身  
東北学院大学大学院修了 博士（経済学）  
2016年4月 宮城大学事業構想学部事業計画学（現、事業構想学部地域創造学）に所属。2018年4月より現職。  
（主な経歴）  
協働まちづくり推進助成制度審査委員（山形市）、起業創業アドバイザー、まち・ひと・しごと創生ステーション支援（利用助）、副市長等まちづくり事業審査委員助成委員（加藤助）、とみやわくわく市民会議 総務（富谷市）など。

**【持ち帰り】（予定）**  
富乃社社内会 会長 内 とも子 様 町内会活動、富乃社内café運営など  
成田マルシェ 代表 堀 とも子 様 成田中学校さくら隊、あかぬい付き母子会活動など  
NPO法人SCR 代表 村上 幸枝 様 はちみつプロジェクト、自然再生活動など  
アトリエアーナ 代表 高 花 奈 様 みんなのマルシェ、ワークショップの開催など  
フットサル教室 代表 山下 咲子 様 スポーツを通じた障がい児の出会いや交流の場づくりなど

**【参加申込】**  
【申込方法】平成30年12月26日（水）まで、別紙申込書でお申し込みください。（電話・メール・FAX）  
【参加費】 無料  
【申込・問い合わせ先】  
富谷市総務部市民協働課 市民協働担当  
住所：富谷市富谷坂松田30番地  
電話：022-358-3250 FAX：022-358-2259 e-mail：kyoudou@tomiya-city.miyagi.jp  
※当日の定員を超えて応募する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

○広報とみや12月号

### 富谷市市民協働セミナー開催

「市民協働のまちづくりについて  
～協働の考え方と取り組み～」

参加を希望される方は、期日まで電話またはメールで申し込みください。  
詳しくは、ホームページでお知らせします。

**【日時】 1月13日(日) 9:30～12:00**  
**【会場】 市役所 1階市民交流ホール**  
**【対象】 富谷市民の方**  
**【申込】 12月3日(月)～12月26日(水)**

問・申 市民協働課 市民協働担当 ☎358-3250  
✉ kyoudou@tomiya-city.miyagi.jp

とみいず！掲載記事

Vol.15  
「はちみつプロジェクト」をテーマに  
富谷市市民協働セミナー開催！


本市総合計画に掲げる「市民の思いを協働でつくるまち」を  
推進するため、協働の基本的な考え方について理解を深め  
ます。実際の活動事例等を通して、協働を学ぶとともに市民  
の皆様との交流機会とするため開催するものです。

協働のまちづくりについて楽しく学べる機会ですので、皆様  
の参加をお待ちしています！

日時 平成31年1月13日(日)9:30～12:00  
会場 富谷市役所1階 市民交流ホール  
テーマ 市民協働のまちづくりについて  
～協働の考え方と取り組み～

講師 公立大学法人宮城大学事業構想学群准教授  
佐々木秀之氏

内容 講話、活動紹介、ワークショップ  
対象 富谷市民  
申込期間 12月3日(月)～12月26日(水)  
申込方法 詳しくは、広報とみや12月号  
またはHPをご覧ください。  
総務部市民協働課  
TEL:022-358-3250



富谷市長 若生裕俊

○富谷市フェイスブック

富谷市さんが写真9件を追加しました。  
1月14日 21:22

【富谷市市民協働セミナーを開催しました】  
市民協働課です。

1月13日（日）に富谷市市民協働セミナーを開催しました。宮城大学事業構想学群佐々木秀之准教授による講義、各種団体からの活動紹介、参加者同士のワークショップを通じ、協働についての考え方を学びました。参加された皆さん、ありがとうございました！

なお、当日の様子は、1月16日（水）18時から「COMチャンネル」のデイリーニュースで放送されます。地域情報アプリ「ど・ろーか」をインストールすることで、スマートフォンでも視聴可能ですので、ぜひご覧ください。

＜ど・ろーかに関する詳細はこちら＞  
<https://www2.myjcom.jp/special/dolocal/>



○広報とみや2月号



**1/13(日)** ～富谷市市民協働セミナー～  
**市民協働のまちづくりについて考えました**

市民の思いを協働でつくるまちを推進するため、市民協働セミナーを開催しました。講義のほか、実際に協働に取り組んでいる市民の皆さんの活動事例紹介や参加者同士でのワークショップが行われ、市民協働への理解を深めていました。